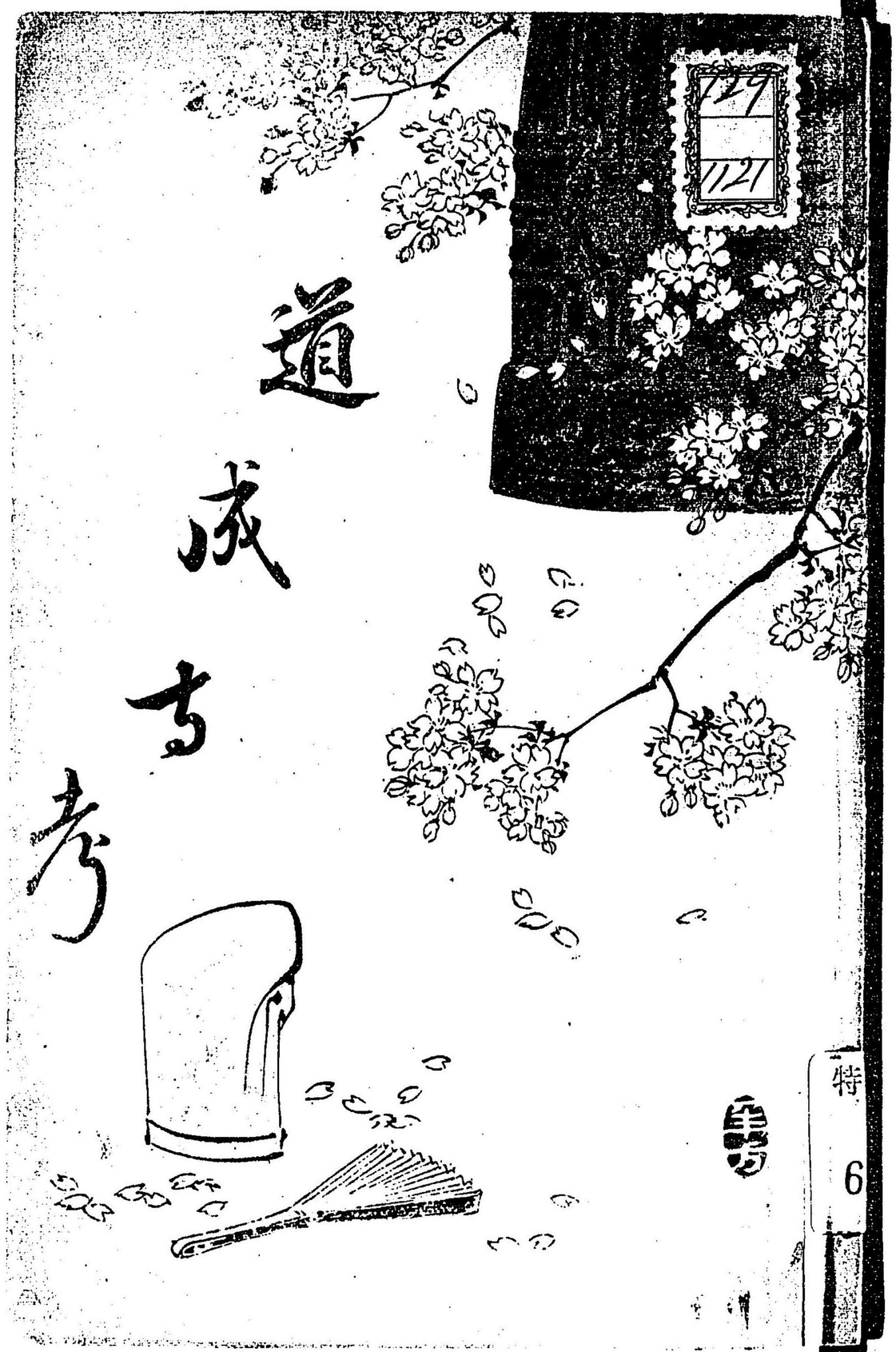

129
1121
特
6

074775-000-8

特30-693

演劇道成寺考

雪の門主人／編

M24
CEK-0073

特30
693

叙

花の外には松ばかり暮そめて鐘やひゞくらんと聞けば地の頓に清々しう成り行くは能樂の道成寺なり鐘に恨はかぎ〳〵ござる初夜の鐘を撞く時は諸行無常さひゞくなりと唄ふを聞けば見る目忽ち花やしく成るは芝居の道成寺なり能樂の清雅なる芝居の穠艶なる各妙味のあるありて幾回見ても見厭きのせぬ善き曲なりとは今更山人の多辨を要せざる事なるべし頃日友人雪の門の主人演劇道成寺考を編して示さる請けて之を讀むに道成

明治二十五年一月

寺舞の起原沿革を記述して精覈遺なく所なし予固より能樂芝居の故實を知る者にあらぎ能樂に芝居に只見る處の穠艶と聞く所の清雅とに心愜情娛とする のみならしが今此書を讀み其清雅穠艶の因て來る處あるを知りては彌道成寺舞の奇賞すべきを知り ぬ因て强いて主人に勸め世に公にせしめ之を書し て叙とす

明治二十四年昔の顔見世月

万里山人

能楽

道成寺

娘道成寺

演劇道成寺考目次

道成寺の由來

附安珍清姫の事

道成寺舞の起原

道成寺舞の沿革

道成寺舞の異同

契情道成寺（附傾城小夜の中山の事）

三國道成寺

中山道成寺

百、千鳥娘道成寺

演劇道成寺考目次

あやめ道成寺
附芳澤あやめの系譜
京鹿子娘道成寺
附中村富十郎の小傳
男道成寺
今様道成寺
花見形風折烏帽子
附三代目羽之丞の略傳
忠文道成寺
二人道成寺
奴道成寺

演劇道成寺考

道成寺の由來

雪の門主人編

道成寺の由來

附安珍清姫の事

天童山道成寺は紀伊國日高郡土生村小字鐘卷に在り俗に鐘卷寺と云ふ天台宗にして寺域は二千有餘坪、此寺は今と距る一千九百九十餘年前文武天皇の大寶年中勅願によりて建立し橘道成が奉行せしとの此寺に昔同國眞名古の莊司の娘清姫が僧安珍の跡を慕ひ來て此處にて蛇に成りしといふ遺跡ありまた其事蹟も古來世間に喧傳すと雖も謠曲道成寺の外には記傳

の之と徴すべきもの無しとは古人も已に之と言へり因て今茲に道成寺鞉の起原と記さんとするに方り謡曲道成寺中の物語りと紀州道成寺の縁起又安珍清姫略物語といへるもの等と折衷して先づ安珍清姫の事蹟と述ぶべし

醍醐天皇の御代に紀伊國牟婁郡に眞名古莊司と呼び近郷にのくれの無き豪家あり莊司の愛娘清姫といへるは容顔艶のにして貞性且つ敏慧なりければ莊司の寵愛一方なら

ず白銀も黄金も珠玉も何のせんと只管清姫の生長とぞ待ちたりける此頃陸奥白川の近傍に住める山伏にて名を安珍（一に安鎮と作れり）と呼べるあり年來三熊野と崇信して歳ごとに一度づゝは必ず同國熊野の御社に參籠なすこと十歳が程に

は更に怠ることの無く又來る度ごとに莊司が許に寄宿す

る例なりしが安珍は清姫とは痛く愛いつくしみ父なる莊司と對話の折節戯れ言に姫が成長の後は是非とも妻に申し受けて道奥へ具し下らんなど言へば父の莊司も必ず參らすべし末長う愛でさせ給へなど言ひつる言葉を清姫は聞きつゝも幼心に眞實と思ひ居たりしこそ是非なけれ斯くて雁往き燕來りて早くも延長六年と成り清姫が十三歳となりぬる葉月の末の事なりしが安珍は例年の如く熊野に詣でんとて莊司が許に舍りけるに清姫は其夜安珍に向ひ妾も早や十三歳と成り侍りぬ疾く陸奥へ具し給はらずやと思入つて陳ければ安珍は大きに驚き其は戯れ言なり山伏の身にて奈で妻とば伴はる可きと色々に賺し慰めたれど清姫はいつのな聞入るゝ容子の無のりしのば安珍は

先きに言ひたる戯言と深く悔み此上は誑すに若しと態と言葉と和らげて御身が左までに決心なす上は今度は必ず連れ往くべければ我が參詣の下向とば待たれよと眞しやうに告ければ清姫は大いに悅びやう〳〵安心せし体なるも安珍は夜の明くるとば待兼つゝ莊司が許と立ち出でんとする時清姫は袂とひのへ下向の日取なぞ仔細に尋ぬるに安珍は氣味惡しとは思へども詮方なきまゝ下向の道筋日取なぞと言ひ聞けて頓て下るべしと言ひ捨て逃ぐるが如く立去りしが夫より後清姫は指折り算へ安珍が下向とのみ待居りしが早や下山の日取となりたるに何の音信もなきものゝ清姫は待ち詫びしさに堪へのねて忍びやうに家出なし先きに聞置きたる下向の道筋と辿りつゝ遇ふ

人ごとに斯く云々の山伏に逢ひ給はずやと問ひながら行く程に一人の僧が氣の毒氣に如何さま然る山伏に出逢ひたり去れど其山伏は奥州路へ向ひて早や十四五町も往きしならんと言はれて清姫扨ゝ此身と欺きしゝと齒と喰ひしばり目と瞋らせ此上ゝ何處までもと傍目もふらで安珍の跡追ひ駈け切目川といへると渡り上野と呼べる所にて漸くに追付きたると安珍は見て大に驚き足と空に逃げ行くと清姫ゝ追ひ追ひて天田川といふ處までいたりしに安珍ハ早や川と渉り倚渡寺に言ひ含めて清姫と渡さぬように成しければ清姫ゝ大に怒り物とも言はで川中へ飛入りしが此時ゝ早や總身蛇体になり炎と吐き尾と掉はし一跳して前岸に躍り上り直ちに安珍の足跡と嗅ぎつゝ遂に道

成寺に至り安珍が釣鐘の中に潜み居ると知り躍り掛りて其釣鐘に卷付きたれば鐘ゝ忽ち熱湯の如く沸き騰り見る〳〵鎔釋なしければ安珍も茲に果敢なき最期と遂げ蛇も亦自ら入江に投じたりと

道成寺舞の起原

謡曲道成寺ゝ足利將軍義政公の時觀世觀阿彌が作れる所(之れと能樂に仕組みしゝ觀世左近之進なり)と言傳ふ

謡の作者付の書に謡ゝ春日神社に仕へ申す外山(寶生)結崎(觀世)坂戸(金剛)圓滿井(金春)四座の太夫作りて當座

〳〵にて能にしたるなりと有れど先ゝ常人の作れるものとゝ思はれず其頃の歌人高僧等が娯さみに作り能太夫に授けて節と付けさせ則ち其太夫の作分にしたるなるべし其ゝ江口山姥ゝ僧一休の作にして卒都婆小町ゝ高野山の宥快の作なりと言ひ傳へ又吉田藏人兼將が能本作者調べの奥書に三條西殿御作四番(餘は略す)とあると見ても知る可し又能ゝ謡と同じく東山殿の時に起り觀世觀阿彌始て之を爲そと有り

其逃るる所ゝ紀州道成寺にて再び鐘と落成するに及び襲に一度び鐘と鎔かせし清姫の靈(即ち蛇)が假りに白拍子に現じ來て寺僧と誑き又も其鐘と鎔のさんとする趣向にて言はゞ安珍清姫が後日とか或ゝ二度目の鐘卷とゝ稱そべき

ものなるが其詞調の秀絶ゝ云ふまでも無く曲中にゝ急の舞、鐘入り、柱巻、ワキ止めなど稱ふる妙奥ありて謡曲中多く見さる所なれば其の道の家々にてゝ古來重き習物として之と扱ふ實に鄭重なり去れば金剛の家にてゝ特に白額の般若の面と用ひ又昔寳生彌五郎が勤めし時に衣裳方が鐘の中へ般若の面と納れ置く事と忘れし爲めに彌五郎ゝ指と噛み切り我面貌と塗り粧ひたりと云ひ先代觀世鉄之丞が勤めし時にゝ觀世新九郎に對し血判なして秘訣と他へ洩さゞると誓ひし等以て之と扱ふことの容易ならざると知る可し世人の之と觀ると喜ぶ亦宜ならずや

然して之と歌舞伎に擬し舞しゝ初代榊山小四郎といふものにて小四郎ゝ後に之と輕業にて演せしといへども蓋し

僅に能樂の一班と眞似たるものに過ぎざるべし其ゝ鐘入の所作事の水木辰之助に始まりしといふと以ても知る可きなり後享保年中(徳川吉宗公の時代)に至りて初代荻野八重桐始て之と淨瑠璃に仕組みて演ずるに及び道成寺舞始めて芝居に現はれたり

道成寺舞の沿革

爾後名優の之と演ずるごとに常に多少の修補又ゝ潤飾と加へて各其典型と存し遂に道成寺舞に十數通りあるに至れり就中初代瀬川菊之丞の中山道成寺及び百、千鳥娘道成

芳澤あやめのあやめ道成寺。中村富十郎の京鹿子娘道成寺の如きゝ皆後世の模範とするものにて又二代目三代目菊之丞の優美婉麗ゝ言ふまでも無けれど四代目團之助の演じたるもの大に世の好評を得て後世此曲を演ずる者多くゝ其形を遵守すると云ふ

中村富十郎瀬川菊之丞ゝ共に稀世の名優にして其演せし道成寺も共に後人の模型と成り遂に京鹿子娘道成寺ゝ富十郎の家狂言と成り江戸紫娘道成寺ゝ菊之丞の家狂言となりぬ

京鹿子娘道成寺ゝ初代芳澤あやめが演じたるものに二代目あやめが修補を加はへて芳澤一統の秘曲となせしと富十郎之を傳へ尙工風を用ひて京鹿子となせしなり

江戸紫娘道成寺（卽ちさなきた道成寺）ゝ娘道成寺といふものゝ嚆矢にして初代菊之丞が勤めたる百千鳥娘道成寺一變して今樣道成寺と成り今樣道成寺又一變して江戸紫と成りしといふ

去れば寛政九年の九月三代目菊之丞が桐座にて勤めたる時の口上看板に

江戸紫娘道成寺の儀ゝ先代菊之丞より傳來の狂言なれど京鹿子娘道成寺と瀨川家筋にて勤むるゝ此度が始めてなり云々

と認めしと見ても道成寺にゝ古くより京派と江戸派の二風ありし如く思はれたり降つて文政天保の頃に迫んで中村歌右衛門出でゝ忠文道成寺。奴道成寺等を演じたり固より技藝ゝ熟練なり演ずる

ごとに不評いなりしも已に慶子(富十郎)路考(菊之丞)の屬勤めし後といひ忠文道成寺も奴道成寺も上方にて已に他優が演じたるものなればとて江戸でハ京鹿子江戸紫はど に珍重はせざりしといふ

道成寺舞の異同

以上述べたる如くにて歌舞伎の道成寺ハ能の樂より出でたる事ハ判然たるが已に歌舞伎に移りてよりハ名優が各機軸と出し又ハ修補と加へなどして遂に十數通りの別ある に至る乃ち之と左に擧ぐべし

契情道成寺

契情道成寺ハ享保八癸卯年二月(徳川八代の將軍吉宗公時代)中村座に於て初代荻野八重桐始めて之と勤む是と芝居にて道成寺と演じたる權輿とそ

三國道成寺

三國道成寺ハ享保十一丙午年三月(矢張吉宗公時代)中村座に於て初代荻野伊三郎始めて之と勤む

中山道成寺

新道成寺ともかつらぎ道成寺とも云ふ

中山道成寺ハ享保十六辛亥年正月(是も吉宗公時代)中村座に於て初代瀬川菊之丞始めて之と勤ひ此時の名題ハけいせい福引名護屋にて大切りに此道成寺と出し長唄坂田兵四郎松島庄五郎三味線杵屋喜三郎にて之と勤む

又此道成寺に中山或ハあつらぎの稱呼あるハ此福引名護屋といふ狂言ハ元と傾城小夜の中山と呼びたる狂言より出でたるものにて傾城のつらぎが無間の鐘と撞くといふ趣向なれば中山又かつらぎと稱えしなりとの因に曰ふけいせい小夜の中山といへる狂言ハ遠江國佐野郡西山村無間山觀音寺の鯨鐘と撞く時ハ未來は無間地獄に墮つると雖も現世ハ必らず富貴の身とな

男 道成寺
娘 道成寺

るといへる事と仕組みたるものにて元祿二巳己年大坂の荒木與次兵衛座にて若女形谷島主水といへるが傾城うら葉の役にて此鐘つきと勤めたるが始めにて其後初代芳澤あやめが京都の早雲座にて勤めたる事ありしが此時までも矢張り鐘と撞きたる者と覺しく之と手水鉢に代へしゝ卽ち初代菊之丞にて享保十三戊申年京都の市山助五郎座にて庄屋六右衛門娘おそまの役と勤めし時手水鉢と鐘に擬らへ打ちしが始めなりと

後元文四巳未年四月大坂の竹本筑後椽座にてひらかな盛衰記といふ新淨瑠璃と出し役名梅ケ枝にて中村座にて菊之丞が演じたる無間の鐘と仕組たるが其文

句の中「袖引ちぎり三百兩つゝむに餘るよろこび涙」といへるあり是ゝ中村座の初日に舞臺にて金と包まんとしたるに初日の事とて包むべきものゝ間に合はざりければ菊之丞ゝ氣といら立ち衣裝の袖と引きちぎつて金とば裏みたる其思入が大に見物の氣に叶ひたりとて翌日より其通りに勤めたりしと盛衰記に作り込みたるものなりと

百、千鳥娘道成寺

さなきだ道成寺とも云ふ

百、千鳥娘道成寺ゝ寛保四甲子年（即ち延享元年なり矢張吉宗公時代）中村座に於いて初代瀬川菊之丞之と勤めッキ

僧ゝ市川海老藏と大谷廣次なり

是れ娘道成寺と稱ふるものゝ根元にして後世數派に分れゝ着付仕形とも概ね此百、千鳥に基のざるなしと云ふ

十數の技風あるに至りたれど誰人にても此技と演ずる時此作者ゝ杵屋彌三郎といひし人にて俳名と扇遊と呼び四代目杵屋六左衛門の弟、執、着天人羽衣の作者、又振付ゝ中村傳次郎なりと

此時ゝ宮古路文字太夫連中と宮古路加賀太夫連中とが一日代りに勤め長唄ゝ吉住小三郎早川新次郎三味線杵屋六左衛門同彌三郎なりと

あやめ道成寺

あやめ道成寺ハ初代芳澤あやめが始めて演じたるものゝよしなれど江戸にて之れと演せしハ二代目あやめにて寛延四辛亥年七月(即ち寶暦元年徳川九代將軍家重公時代)中村座にて「戀女房染分手綱」の四幕目へ道成寺傳授の段と出し由留木定之進妻八重子の役にて勤めたり

此時ハ總体能懸りにて破風造り高臺の附け舞臺橋掛り飾り附けまで悉く本業と摸したるが興行中に故障おこりて餘儀なく飾り附け橋掛り等と取り除き置舞臺丈ハ其儘にて引續き興行せしが後世置き舞臺と用ふるハ此時より始りしといふ

初代芳澤あやめハ元山下又七また權七とも呼び始めハ立役なりしが後に女形となり其技名一世と壓倒し

其頃の評判記に古今若女形惣藝頭と褒揚したり正徳二壬辰年の(徳川家宣公時代)顔見世より江戸へ下り市村座へ出勤す後享保十四己酉年七月十五日年五十六にして沒すあやめに四男あり長ハ二代目あやめにして次ぞ菊松といひ山下金作の養子となりて又太郎と稱し後に京右衛門(俳名好玄)と改む其次と中村富十郎とし季と三代目あやめとす

二代目芳澤あやめハ(俳名春水家號橘屋)初代あやめの長男幼名ハ崎之助享保十五庚戌年二代目と繼稱す延享二乙丑年の冬始めて江戸市村座へ出勤す寶暦四庚戌年七月十八日年五十二にて沒す

三代目芳澤あやめ(俳名一鳳)ハ初代あやめの四男幼名

と万代と呼び後に崎之助と稱せ明和元甲申年三代目と襲ひたり安永三甲午年十月十八日年五十五にして沒す

京鹿子娘道成寺

京鹿子娘道成寺ハ寶暦三癸酉年二月(矢張家重公時代)中村座に於て中村富十郎が江戸下り初御目見の時之と勤めソキ僧ハ中村傳九郎市川八百藏なり

是も亦杵屋彌三郎の作にて長唄吉住小三郎早川新次郎坂田仙四郎三味線杵屋彌三郎同作十郎同小四郎にて之と勤む

道成寺に是迄ハ鞠うた并びに山盡しとともに無うりしと此時杵屋作十郎の工夫にて始めて組込みたりと

因に曰ふまり唄山盡しハ元と西國兵五郎座敷狂言に山伏問答といふ小皷一挺の拍子舞の如きものにて字野長齋といふ人巧みに之と撰ちたる物なりと

又娘道成寺の文句の中に「都育ちハ蓮葉なものぢや」とあると富十郎が謙遜の心にて「浪花そだちハ蓮葉なものぢや」と唄はせしも大に人氣に叶ひしとぞ

因に曰ふ蓮葉女とハ昔し浪華の旅店にて客と扱ふが爲めに備び置く婦女の總稱にて兎角下品にして且つおとなしうらぬ女子と指したる稱呼なりしといへり今も遠き田舍にて竹の皮の乏しき土地にてハ蓮の葉に食品等と裹み藁にて之と括る餘所見ハ至つて野卑

なるものなり

富十郎ハ生得器用な人にて歌舞絲竹ハ云ふに及ばず書畫歌俳の道にも熟達し此の道成寺の繪看板も自筆にて見事に描き其の上に又自筆にて「咲からハ龍頭へとゞけ山櫻」と自作の句と認めたり以來誰人にても此曲を演ずる時ハ名題の上へ「及ばずも龍頭へとゞけ初ざくら」「及びなき深山さくらや龍頭まで」「御贔負といはずのたらず山櫻」「龍頭までとゞけ心の山ざくら」抔と必らず書くことゝ成りしも此時より起りしなりと

此興行中或る人が富十郎に問ひて曰く此度の道成寺ハ實に申分なき出來にて古來稀なる大當りなれど鞠うた丼に花踊りの處又戀の手ならひの所などハモッット六ッケ敷

手振りのある事かと思ひ居りしに餘り込み入りたる處も見へず如何なるものにやと尋ねしに富十郎答へて曰く身不肖なれど今少し込み入りたる振り事の工夫なきにハあらねど自儘に古來の形と變じて只見物の目に叶ひ候よういたしてハ古來の形もそたり又二ッにハ舞の手振りが六ッケ敷なりて後々誰でも舞ふといふ事にハ參るまじと考へたれば扨こそ古來のまゝにて相勤め申候なりと答へたれば或人ハ世に名と殘す程の名人の用心は又格別のものなりと大に感心なしたりと

此興行市中大評判となり二月より六月まで百二十五日間興行し芝居の二階三階とも櫻の造花と挿し是れに矢車(富十郎の紋なり)の附きたる提灯と釣り下げ樂屋にてハ賑や

のなる當り振舞と爲せりといふ

後安永六丁酉年二月中村座に於て姥ヶ池の姥櫻、兒ヶ淵の兒櫻「鐘掛花振袖」といふ名題にて娘道成寺と(ワキ僧ハ嵐三五郎大谷廣次にて)演せし事あり此とき同座ハ其前年の秋より引續き景氣よろしからず春狂言の青柳曾我も至つて不入にて既に舞ひ納めんとまで相談せしと二月十五日より道成寺と出幕せしに四日目より見物靡至し日々に朝五ツ時にハ急度客止めとするように成りしかば寶暦三年の長興行の例に倣ひ引續き六月十一日まで日數百二十五日間打ち續け樂屋にてハ當り振舞と三度まで爲したりと

又此時に能樂師某に就きて急の舞の口授と受け大いに開

發する所ありて亂拍子ハ一層の見榮えと增したり然れば自分も此曲に就てハ大に得る所あると知り此後養子蘭畊の追善興行に之と演じたる時ハ名題を「道成寺傳授睦言」と据ゑたることも有りて娘道成寺ハ是より錦上に花を添へたる如くなりしと

此人ハ天明四年の評判記に歌舞伎一道惣藝頭の位置と占めたる名人にて特に娘道成寺にハ獨得の妙趣ありとて三ケの津到る處大入りと取らざることなし去れば寶暦三年より天明三年まで三十一ヶ年の間に十一回道成寺を勤めたりしが演ずるごとに長くハ百二十餘日短きも六七十日間ハ必ず興行なしハにより前代未聞古今獨歩の名優と稱せられたりとぞ

中村富十郎ハ初代芳澤あやめの三男にて享保四亥年二月大坂に生れ幼名と崎彌といひ九才の時初代中村新五郎の子に養はれ後中村富十郎と名乗りたり(俳名慶子、號琴嶺舍、家號天王寺屋)同十四酉年十一月養父に從ひて江戸に下り同十六亥年市村座の春芝居に牛若丸の役にて初めて舞臺に上る(年十三才)翌十七子年上坂し寛保二戌年再び江戸へ下り爾後延享寛延寶暦明和安永天明の四十餘年間ハ屢江戸大坂の間に來往し天明六午年七月京都北側の芝居にて「傾城稻葉山」出勤中病氣となり八月三日沒す年六十八、大坂中寺町藥王寺に葬る法名と蓮花院慶子日榮と云ふ富十郎資性溫厚にして風流と好み餘暇あれば琴棋書畫とのみ弄び

二人道成寺
傾城道成寺

しが畫道特に妙にして俳諧亦巧みなり其病中の吟に「世の人にのぞれ納め魂まつり」又辭世の句に「案じなよ胸の眞如の月の旅」富十郎一男一女あり男は中村新五郎（俳名太中）にして女とおそよと呼ぶ加茂川のしは（俳名袖歌）と迎へて聟とす安永中新五郎のしは共に慶子に隨ひて江戸に下り木挽町に住居しが同じく六酉年十一月中兩人とも病に罹り同月十九日一日の中に兩人共に死せり

男道成寺

男道成寺は寶曆四甲戌年正月（是も家重公時代）中村座に於て初代中村助五郎が勤めしが始めなり

此時の名題は「夜鶴花巣籠」南都西大寺鐘供養の趣向にて本名三保ノ谷義澄といふ役にて勤め大詰に鱗形四てんにて賑やかなる立廻りあり

今様道成寺

今様道成寺は寶暦六丙子年十一月(矢張家重公時代)市村座に於て二代目瀬川菊之丞が元祖路考の追善の時に演じたるものなり

二代目菊之丞は元は瀬川吉次と稱せしが當狂言に二代目と繼稱せり時に年十五才後に王子路考といひし者是なり此時座元羽左衛門が右の改名披露のために島の千左衛門といふ役にて長上下にて舞臺に出で口

上と述べしといふ

此の道成寺も大に世人の喝采を得たりと雖も此時新に出で來たる物にはあらずして百千鳥娘道成寺に頗る修補を加へて一層の光輝を添へしめたるものなり後三代目菊之丞が風折烏帽子を演ずるに至り又大いに潤飾を加へ始めて千秋不易の江戸紫娘道成寺を全成せりと云ふ

道成寺の中、小鼓計りにて「うつや太鼓」といふ文句「龍田川にはちんちりの葉」といふ文句あり是れは昔しは土佐節にて寛保の頃までは道成寺の中には無ありしと此時始めて組み入れたるものゝよし

又太鼓地すみて狂ひになる處は昔しは三味線ばかりなりしと是も此時より改めて先づ花道へ行き爰にて鐘見あり

夫より太皷流しにて本舞臺へのゝる此内手に持ちたる櫻の花の散る仕掛け又本舞臺にて鐘と見つゝ一寸坐はる見得あり夫より狂ひとなることにせしといふ

花形見風折烏帽子

花形見風折烏帽子は安永三甲午年正月(德川十代將軍家治公時代)市村座に於て瀨川富三郎(後に三代目菊之丞)が二代目路考の一周忌追善狂言に勤めたるものなり

此時の狂言は「結鹿子達染曾我」大切に此道成寺と演ず但しワキ蓮生坊は羽左衛門同じく西行坊は三五郎なり

此人の手振は一体が至極柔婉なりしが上に羯皷の舞の「羯皷ひゞくらん」より「彌生の頃や」の邊りまで大小皷(柏崎五四郎太田長兵衛)の打合せあり又舞の手も在來の形と一變せしのは適れ未曾有の出來なりと江戸中の大評判となり至る所今路考〳〵と道成寺の評判のみ且瀨川染富三染なども唱ふる新形大いに流行し又子女にて手遊の羯皷と弄そばぬはなき程なりしと云へり去れは後世誰人が道成寺と勸めても羯皷の舞と詰の鐘入りとは必らず此人の形と用ふる事に成りしといへり

此時は市山改め瀨川富三郎が初御目見へと改姓披露と兼ねて演せし者なるが其頃有名の振付け西川扇藏が此道成寺と一見して扨も〳〵上手な役者が出來れば出來るものゝ後生恐るべしとは此人の事なるべし瀨川の家も先づは磐石なりと只管感歎なせしといふが此年の冬富三郎

は三代目菊之丞と稱せり

三代目菊之丞は大坂の産にして振付の達人市山七十郎の次男にて元は市山富三郎と稱したりしが此時始めて瀬川と冐し後又三代目菊之丞と襲げり仙女路考即ち是なり

此人初下りの時より大に江戸の人氣に叶ひ後には濱村屋大明神なゞゝ持て囃されし由は今も尚老人達の炬燵ばなしに聞く所なり去れば路考が一周忌の追善句集に「濱むら屋大明神も後の世は大菩薩とぞ成りにける哉　式亭三馬」「一週忌けふは佛と言はれけり　濱村屋仙女大明神樣　曲亭馬琴」是等を以ても其頃の人氣を想像すべし

忠文の道成寺

忠文の道成寺と稱ふるは此以前嵐三五郎が大坂にて已に演せし事のありたる由なれど江戸にては文政十二巳丑年十一月　中村座に於て中村芝翫が「金幣猿島郡」の大切りに「道成寺思戀曲者」といふ名題にて演じたるが始めなりと出語りは富元常磐津長唄の連中また役名は白拍子花子實は忠文の死靈(芝翫)白拍子さくら子(菊之丞)にて芝翫の花子大勢に取圍まれ白拍子姿引き抜いて忠文となる處へ菊之丞のさくら子出で私が病氣もゐ芝翫さんに踊りと賴みまし云々と述て道入る跡大立廻りとなりト〻忠文の幽靈に化し鐘入りになる趣向もゐ是と忠文の道成寺と呼べり

といふ

二人道成寺

二人道成寺は天保十一庚子年十一月　市村座に於て「鎭西八郎降魔鏑」の大切りに「道成寺二人鐘入」常磐津長唄連中にて之と勤む

役名は白拍子連理實は主馬小金吾(市村羽左衛門)白拍子佛御前實は鎭西八郎爲朝(中村歌右衛門)なり

奴道成寺

奴道成寺は天保十四癸卯年十一月　河原崎座に於て中村歌右衛門が「稚軍法振袖武藏」二番目大切りに「江戸紫男道成

寺」の名題にて勤めたり

出がたりは富もと常磐津長唄連中にて役名は白拍子花子狂言師升六實は龍神清姫の亡靈又其趣向は前の忠文道成寺と大抵同じようなるものにて亂拍子ありて白拍子姿と引脫き狂言師の姿になり　面の所作となる之れと奴道成寺といふ

此所作も江戸にては始めてなれど大坂にては淺尾工左衛門が已に演じたる事ありしといふ

明治廿四年十二月廿二日印刷
仝　年十二月廿六日出版

定價八錢

發行者　今井磋刀　東京市浅草區小鳴町七番地

印刷兼發行者　神田松衛　東京市日本橋區久松町四番地

版權所有

大賣捌書肆

東京市新大坂町　小林喜右衛門
仝　本石町　上田屋書店
仝　本石町二丁目　博文館
仝　通り一丁目　大倉書店
仝　通り四丁目　春陽堂書店
仝　通り四丁目　金櫻堂書店
仝　南傳馬町[illegible]目黒十郎[illegible]支店
仝　浅草三好町　大川屋書店
仝　馬喰町　山口藤兵衛
仝　神田表神保町　東京堂

0
3